慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カント国家及法律哲学と論理形式主義経済学（其二）
Sub Title	
Author	福田, 徳三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1918
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.12, No.1 (1918.) ,p.100- 115
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19180100-0100

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カント國家及法律哲學と論理形式主義經濟學（其二）

福田德三

（五）

予が前段に譯出する所カントの眞意を傳へて粗ぼ誤なさに庶幾しと信ずるものなりと雖も更らに精密ならんことを欲し試みにくスチー氏の英譯本 The philosophy of law : an exposition of the fundamental principles of jurisprudence as the Science of Right : translated from the German by W. Hastie, B. D. Edinburgh 1887. を繙きて該當の章句を探ぐるに意味更らに明瞭なるものあり。仍て其文を左に掲ぐ。

These appear to be entirely empirical, and it may therefore seem questionable whether they are entitled to a place in a Metaphysical Science of Right. For, in such a Science the Divisions must be made according to Principles *a priori*; and hence the *Matter* of the juridical relation, which may be *conventional*, ought to be left out of account, and only its *Form* should be taken into consideration.

Such conceptions may be illustrated by taking the instance of *Money*, in contradistinction from all other exchangeable things as Wares and Merchandise; or by the case of a *Book*. And considering these as illustrative examlpes in this connection, it will be shown that the conception of *Money* as the greatest and most useable of all the Means of human intercommunication through things, in the way of Purchase and Sale in commerce, as well as that of Books as the greatest Means of carrying on the interchange of thought, resolve themselves into relations that are purely intellectual and rational. And hence it will be made evident that such Conceptions do not really detract from the purity of the given Scheme of pure rational Contracts by empirical admixture. p. 124-5.

The Rational conception of Money under which empirical conception is embraced, is therefore that of a thing which, in the course of the public permutation or Exchange of possesions determines the price of all the other things that form products or Goods. p. 128.

According to Adam Smith, Money has become, in all civiised nations, the universal instrument of Commerce, by the intervention of which Goods of all kinds are bought and sold or exchanged

for one another ; —— This Definition expands the empirical conception of Money to the rational idea of it, by taking regard only to the implied *form* of the Reciprocal Performances in the Onerous Contracts, and thus abstracting from their matter……The definition, therefore, accords with the representation in the above Synopsis of a Dogmatic Division of Contracts *a priori*, and consequently with the metaphysical principle of Right in general. p. 129.

猶詳細は左右田博士の駁論を得て後徐ろに之を考定す可し。

（六）

カントは『純粹理性批評』の終に於て哲學の答ふ可き問題に三個ありと云へり。『予は何を知り能ふか』『予は何を爲さゞる可からざるか』『予は何を望み得るか』是れなり。第一の問に答ふるものは認識論即ち悟性及感性の批評なり吾人は之によりて可能なる經驗に屬するものは何直觀的性質を有するものは何現象は何なるかを知り得可し之に反して『物其れ自ら』は經驗す可からず直觀す可からずして之を認識すること能はずとせり。第二の問に對して答ふるものは倫理學にして一切の理性的存在と其の一切の實際的職分に對して普遍妥當なる規範たる絶對命令を示めすものとす。凡ての人が予の地位に在りたらば爲す可かりしこと予が萬人に對する法則として寫象し能ふ所之れ予が爲さゞる可からざる所なりとする是れなり。第三の問題は第二の問題に對する答に基きて答へざる可からず。予の望み得る所は倫理の法則を充す可能性が要求する所に限る。此れよりして靈魂の不滅は之を認めざる可からず。斯く三個の問題ありと雖も其最も重要なるは第一の問題にして即ちカント批評哲學に於ける重要の問題は實に形而上學の問題是れなり。（*Huxley*, Hume with helps to the study of Berkeley. Collected essays. New York. 1902. Vol. VI. p. 57.）

カントは哲學と數學とを嚴密に對立せしめ數學は純粹直觀に於ける概念の構成より起る認識にして哲學は概念より生ずる認識なり、數學に於ては直觀的部分の綜合によりて對象を立て哲學に於ては認識の對象は先天的に存するものにして先づ之を究む可きものなりとし、哲學をPropädeutik即ち批評とSystem（體系）とに分ち前者は準備的の學なりとし體系は之を形而上學と經驗（應用哲學）とに分つ。眞正なる哲學とは形而上學のみを云ふ、即ち純粹理性の體系にして經驗より獨立し

て會得し又た建立せらる可き認識の一體なりと云ふ。形而上學は分つて自然形而上學と道德形而上學とす。道德と法律とは道德形而上學の研究する所なり。自然形而上學は Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaft に於て之を考究し、道德形上學は先づ Grundlegung zur Metaphysik der Sitten（書目四）に於て緒論を下し後 Metaphysik der Sitten（書目三）に於て詳論を試みたり。共に先天的原則を立てゝ其哲學を開陳するものとす。他方に於てカントは經驗哲學を斥けて不純の學なりとし學問の名を之れに下すすら不可なりとす、經驗心理學、實驗物理學、化學等の如き是れなり。彼謂らく各科學には必ず先天的構成による眞正の學問含まる此眞正なる學問は數學によるものなり、故に各科學は其內に數學を含む程度に於て眞正の科學たり數學を全く含まざる心理學化學の如きは眞正なる學問と云ふ可からずと。學問の意義を斯く狹く解釋し認識とは必ず先天的綜合判斷に於てのみ言表はし得るものに限るとする以上は、經驗的に構成したる智識は認識に非ずとするは當然にして從つて學問たらざるとゝなるの外なし。即カント哲學の根本問題は『如何にして先天的綜合判斷は可能なりや』の一問に集中する所以にして（書目十三第三頁）而して是れ實に『經驗主義によれば一切の自然科學が確實なる智識とは云ふことを得ずして實用的には不足なしとは云ふものゝ畢竟一個の主觀的信念に過ぎないと云ふ論理の峻嚴に愕然として驚異の眼を見張つた結果である』（同上第九頁）之を平明に言へば經驗より獨立すると云ふとが即ち普遍妥當性を與ふる所以なりとするものなり。經驗より獨立して普遍妥當なるものを先天的要素とす。經驗認識は認識者と其の經驗對象との結果と認む可きものなれば經驗より獨立すと云ふことは要するに認識者又は認識能源に係るとの意味に外ならず即ちカントの『ア・プリオリ』とは一の主觀性にして先天的要素とは普遍妥當なる主觀性のことなりと解す可し。『經驗より獨立す』と云ふに二樣の意味ある可し。其妥當に於て獨立すること即ち論理的獨立と、其起源に於て獨立すること即ち發生的獨立と是れなり。發生的獨立はウアイヒンガーによれば二樣の意味を有す『經驗に促がされたるに非ざること』と『經驗より導き來り又は經驗より派生するものにあらざること』是れなり。カントは『ア・プリオリ』なる語を時としては論理的獨立の意に用ゐ時としては發生的獨立の意に用ゆ。例へば一切の認識は經驗より起るにあらずと云へ

るは發生的獨立の意なり、之に反し一の認識の必然性及普遍妥當性は經驗によりて制約せらるゝ能はざるものなりと云へるは論理的『ア・プリオリ』の意にて云ふなり。認識主體に係はると云ふは發生的獨立にのみ就て云ふものなることは疑を容れず。即ち形式科學(數學、數學的物理學)に於て普通に用らるゝ方法たる對象を先天的に構成し普遍妥當の原則を立つることは、經驗より論理的に獨立するのみにして發生的に獨立するものにあらず。一判斷の普遍妥當性と必然性とは其內容が發生的に經驗より獨立することの標準たる能はざること明なり。先天的構成を試むる材料は經驗より派生することは一向差支なきなり。されば、カントは認識要素の先天性は同時に其主觀性たることも此の主觀性は之に相應する現實性を排斥するものなることも共に之を證明したることなきなり。カントが形式の純主觀性を前提したる理由は認識の普遍妥當性と必然性とは之によりてのみ保障せらるとなし、之れを以て科學可能の條件として要求せらるゝ所なりと爲したるに在り。然れども普遍妥當性と必然性とが經驗的起源と矛盾するは必竟するに新なる經驗新なる觀察が起りて變化を必要とするに至る可きが爲めのみ。

たとへカントの『カテゴリー』と『シエマ』とに從ふも經驗對象に就て此事起るを免るゝ能はず。即ち經驗認識には絕對的意味にて云ふ普遍妥當性必然性なるものなく、與へられたる經驗が繼續する限りと云ふ、假定の下に於てのみ妥當性を認め得可きのみ。されば、カントの認識論は唯だ形式的科學の理論たるのみ之を以つて經驗科學、實在科學の理論たりと云ふこと能はざるなり。即ち彼れが數學を含む程度に於て凡ての科學は科學たりと云へるに徵して知る可きなり。カントに從ふときは我等の學に於ける如く、觀察し實驗し歸納するものは科學に非ず化學心理學は科學に非ず經濟學も亦科學に非ず。カントは數學を以て科學の模範とし、たり數學は最も適當なる意味に於ける形式科學なればなり。他の科學は之に準ずるを得可き限りに於て科學たり得るのみ。然るにカントは必ずしも此立場を一貫せずして純粹悟性の原則を論ずるに方り本來の意味に於ける經驗を拉し來ること尠からず『ア・ポステリオリ』に與へらるゝものゝ考究に多くの力を用ゐたり。斯くして彼は單に形式的科學に就て主張したる所を擴めて一切の科學の理論と爲すに至れり。故に彼が實在的科學の範圍に入るに及んで彼の根本原理は之を

一貫すること能はず玆に幾多の矛盾と缺陷とを現はすに至れり。（E. *Caird*, The critical philosophy of I. Kant. 2. F. Glasgow. 1909. Vol. 1. p. 209 以降 K. Fischer, Geschichte der neueren Philosophie. Jubiläumsausgabe. Bd. V. (4. A.)Heidelberg. 1899. S. 531 以降）キユノ

ヘ曰く

Ueber Anläufe, dunkle Bestimmungen und unzureichende Betrachtungen ist er dabei nicht hinausgekommen. Er hat eben nirgends den Versuch gemacht, den Prozess der empirischen Forschung selbst mit iher Setzung und Bestimmung von Realitäten theoretisch zu behandeln, und man misversteht deshalb Kants Absicht und den Anwendungsbereich seiner Methode, wenn man bei Ihm schlechthin von einer Theorie der Erfahrung redet. Nur insofern die Formalwissenschaften Voraussetzungen der Realwissenschaften enthalten, sind auch diese in seiner Erkenntnistheorie zur Sprache gekommen.... So ist Kant zu der so naheliegenden falschen Umkehrung gelangt: Synthetische Urteile *a priori* sind wissenschaftliche Erkenntnisse——wissenschaftliche Erkenntnisse sind synthetische Urteile *a priori*. Was nur für eine Klasse von Wissenschaften gilt, ist ihm zum Kennzeichen aller geworden.

『彼は（認議論を實在科學に應用するに方つては）始めの試み、不明瞭なる決定、不十分なる考察以上に出でず。彼は何れの所に於ても經驗的研究の過程を實材の設定及決定其のものを以て理論的に取扱ふ試みを爲したることなし。故に學者彼の學說に就て經驗理論其ものありとするものあらば之れ彼の意圖と其方法の應用範圍とを誤解するものなり。形式科學は實在科學の前提を含む限りに於てのみ彼の認識中に論ぜられたるのみ。斯くてカントは陷り易き誤れる顚倒に陷れり曰く先天的綜合判斷は科學的認識なり——科學的認識は先天的綜合判斷なりと。即ち科學の唯一種類のみに就て妥當なることを彼は凡ての科學の表徵と爲したり』（書目（十）第九十一頁）

轉じて左右田博士の言を聞くに曰く『吾等が玆に當面の問題とする所は認識論に於てロック、ヒユーム等の心理主義を破つて批評主義を主張したるカントの態度に在る。カントはヒユームの心理主義によつては認識の普遍妥當性を與ふ可き所以なきことを正當に理解し之あるを得せしむるものは唯だ認識の形式が先天的、超越的（先驗的）而かも內在的にして素材の後天的、經驗的なるものに對する所以を說明する以外にないことを悟つた。其の結果は彼自らが其の哲學上の態度

を嘗へてコペルニクスの天文學上に於けるものに似たりと云つた樣に私かに認識論上の革命家を以て任じたのである。吾々の認識が對象に向つて朝するものと見るときには其の對象を超へて先天的に概念に依つて擴充せんとする總ての試みは無效に歸せざるを得ない。然れども一たび之と反對に却つて認識の對象が吾人の認識に向つて朝するとすれば對象の認識の求められたる可能性と、より善く先天的に適合することを得て所謂「形而上學」の問題を更に善く說明することを得ざるかとの疑問を起して直觀形式及び悟性概念の先天性を說き遂に吾々の一般經驗を可能ならしむる條件は同時に經驗の對象を可能ならしむる條件であり此くして先天的綜合判斷に於て客觀的妥當性を有することを見得べしとの大原則に達したのである。故にカントに從へば經驗は吾等に與へらるゝものに非ずして吾等によつて造られねばならぬ、從つて吾人が依つて以つて一般經驗を造る可き法則は對象の經驗につきて妥當であるから又經驗の對象其自身につきて妥當でなければならぬ。（中略）此くして吾等と外界とは認識論上全く位置を顚倒せしめられたること誠にコペルニクスの地動說に髣髴たるものがある此の論立せられて初めて物如界は認議論上不可知の界として認識の限界を畫せられたると同時に吾人の事物に關する認識は確實性を得來り普遍的に妥當なるを得て玆に始めて心理主義は（中略）認識論上成立の餘地なく（中略）心理主義によつては認識の起源は如何樣にも精細に究めらるゝことが出來るけれども此くの如くして見られたる認識は畢竟するに其の妥當性に關して特殊的、偶然的であつて普遍的、必然的なることを得ない。之あるは唯だ形式主義によつて認識の先天的條件及原理が決定せられたる場合に於てのみ經驗の可能の條件が經驗の對象の可能の條件と見られ得るによつて出來ることである。（中略）認識を可能ならしむる所以の根本を離れては認識の起源發生に關する經過は嚴正に云へば混沌たる經驗素材の雜列に過ぎぬ之を既に一の秩序ある認識發生の經過と見ることを得る爲めには之を導く一箇の先天的形式なかるる可からず此の先天的形式を定めたものがカントの超越（先驗哲學である』書目（十一）九―十二頁と。博士の云ふ所誠に克くカント批評哲學の眼目を描出するものなる可し然り然れども其は形式的科學に就てのみ十分に認め得可き所にして實在的科學、經驗科學に就て同じ程度に於て之を主張する

とは如何なるカント派學者と雖も未だ認むる所と云ふ可からざるなり。博士は中間の手續を一切省略して形式的科學に就て普遍妥當なる以上直ちに經驗科學に就ても然る可しとして一躍的斷案を下されたるものゝ如し。乃ち博士は右に續て直ちに『茲に「ゾレン」の界を見たるが故に認識の妥當性が普遍的必然的なるを得る(!?)と同時に（福田間、同時とは何れの時を云ふか？）認識の限界を決定することを得るのである』（同上第十二頁）と云はるゝのみ。是れ豈に驚く可きの大飛躍に非ずや單に『茲に』の一語を以つて博士はベーコン以後幾十の學者が苦心慘憺研究したる所を一掃し去られたり。我等は博士の『茲に』を知らんとして言ふ可からざるの苦みを嘗めつゝあるものなり。若し單に『茲に』の一語を以つて這箇の大距離を一跨ぎにし得るものならば我等過去一切の骨折は煙散霧消す可きのみ。博士の經濟哲學可能論、カントに據る形式論理經濟學への摹進は一見甚だ簡明にして徹底的なる我等は博士の一言下に直ちに頓悟して這箇天來の福音に赴くの外なきが如く見へたる、其の福音は詮じ來れば『茲にの福音』に外ならざりしなり。是れ博士が『當面の問題』とせらるゝ所なり。我等失望せざらんとするも豈に得可けんや。

（附言）前號の拙文に對して敎を賜ひたる同人尠からず、就中小泉敎授はシュルツエ、グーヴアニッツは國民自由黨に屬せず進歩平民黨の代議士なる由を敎へられたり謹んで此誤謬を訂正す。大西敎授はシュルツエは其後ブレンタノ先生七十賀集に於て『經濟學？』と題する論文を寄せて『カントかマルクスか』の論文の續論を公けにし其内に如何にリッカートを取扱ふ可きかを商量したりシュルツエが爾後何も爲す所なきが如く予が云へるは誤なり但し戰時中瑞西に滯在せざりしものが此事を知らざるは恕するに足ると敎へらる。然るに右賀集に載せたる論文中には如何にリッカートを取扱ふ可きかの商量の如きは一言半句も之を着けず彼がリッカートに論及する所は唯だ左の二句あるのみなり。

Das Gemeinsame der wirtschaftsgeschichtlichen mit aller historischen Methode fällt aus dem Rahmen vorliegender Untersuchung heraus wobei auf die grundlegenden Arbeiten Rickerts verwiesen sei. Festschrift für Lujo Brentano. 1916. S. 408.

Die Wirtschaftswissenschaft ist Kulturwissenschaft in dem heute üblich gewordenen Win-

delband-Rickertschen Sprachgebrauch. S. 401.

即ちシュルツエはリツカートを其儘に受取るに止り之を如何とも取扱はんと欲せざること明なり。而してシュルツエの論文其ものは全體を通じて決して彼の前文の續篇たる意義を有するものにあらざることは言ふまでもなき所なり。予が此文を全然考の外に置きたるは決して誤に非ずと確信す。シュルツエの此文よりも同賀集中に載せたるドリルの『經濟學と意思の自由』百十三頁至百三十二頁こそ寧ろ問題に多少の關係ありと云ふ可けれ。然れどもドリルが經濟學は其倫理學派に於て『ゾレン』を論ずるによりてカントの意味に於ける眞正の學問となり而してプレンタノ先生は此の意味に於て『價値判斷』を經濟學に認めたる先驅者の一人なり

Derer aber die dieses Bewusstsein geschaffen haben, indem sie die ethische Nationalökonomie begründeten, und die damit die Initianten der deutschen Sozialreform gewesen sind, wird jede künftige Zeit, die gesunden Sinn hat, mit Stolz und Dankbarkeit als grosser Representanten der Nationalökonomie gedenken. Zu ihnen gehört *Lujo Brentano*. S. 131-2.

と云へるはブ先生一生の主張を知るもの殊に先生の『歴史に於ける倫理と經濟』を熟讀したる者に取りては甚だ奇異の感を與へずして止む能はざる所なりとす。大西教授は亦予がテラ・インコグニタとせるは伊太利語の發音としては誤れりインコニタと讀む可しと教へられたり、然れども此成語は拉丁語なり拉丁語の讀方は一定しあらず各國人己が儘に發音す、予は從來凡ての場合に於けるが如く之れを獨逸流に讀みたり、而して拉丁語を伊太利人の如く讀む可き義務は日本人たる予輩には寸毫もあることなしと信ず。故に折角乍ら訂正せず。左右田博士は書を寄せて予が論旨に徹頭徹尾反對なり如何にしてカントの貨幣概念と博士の『ア・プリオリ』とが連絡するか之を知るに苦むと云はれたり。是れ予が正さに期待せる所にして而して博士詳細の駁論を得んことを切望する所なりとす。諸同人の垂教に對しては深く謝意を表し更らに向後の叱正を切望するものなり。